新郡市医師会長の紹介

岩内古宇郡医師会

会長　千葉（ちば）　理（おさむ）先生

このたび、岩内古宇郡医師会の会長になられた千葉理先生を紹介させていただきます。

岩内古宇郡医師会は岩内町、共和町、泊村、神恵内村からなり、岩内町は協会病院、入院・透析施設のある岩内大浜医院、他８医療機関、共和町は３、泊、神恵内村はそれぞれ１医療機関があります。千葉先生が岩内に戻られた2000年（平成12年）の岩内の人口は16,000人強、現在は11,000人台になりここ20年で約30％の人口が減っている過疎地域です。

千葉先生は岩内生まれの岩内育ちで、高校まで岩内で生活しています。その後、大学卒業とともに北海道に戻られ、北海道大学形成外科に入局し、各地で研鑽を積まれました。1998年に勤務した室蘭市の日鋼記念病院で家庭医学というものを知り、北海道家庭医療学センターで研修後、2000年に千葉外科医院を継承しました。形成外科では岩内での継承は難しいと考えられるので、家庭医学とであったことが、岩内へ戻り、継承することにつながったのではと推察します。ゴルフが好きなことはわかっていましたが、今回、J.S.A.ワインエキスパート、唎酒師、国際唎酒師の資格もあることに驚いています。今後、機会があれば、医師会での飲食の席でその知識とうんちくを是非語ってもらいたいと思います。医師会で多く発言はされませんが、発言される時には、物事の方向性を決定するのに大切な発言内容が多く、また、皆さんの話をよく聞いた上での発言が多いように思います。まだまだ、コロナに対する医師会としての対応が多く、大変とは思いますが、コロナ対応では前医師会長が定めてくれていたレールにのり、さらに千葉先生のカラーが出せる医師会運営ができるようお手伝いできればと思います。

北海道医報通信員
岩内古宇郡医師会監事　寺山亜希子

釧路市医師会

会長　柴田（しばた）　香織（かおり）先生

令和４年６月、久島貞一前会長の後任として柴田香織先生が第15代の釧路市医師会会長に就任されました。

先生は昭和31年、十勝の大樹町のお生まれの66歳です。昭和57年に日本医科大学を卒業され、札幌医科大学第一内科に入局されました。医局長をされたのち平成６年より札幌の道都病院に勤務されておりましたが、お父様の柴田医院院長の体調不良のため平成13年に釧路市に戻られ、翌年柴田内科胃腸科医院院長に就任されております。平成24年には医療法人社団香寿会柴田内科医院に改組し、理事長・院長に就任されました。

以来、ご専門の消化器内科を中心として地域の皆様の信頼も厚い診療所としてご活躍されております。

医師会としては平成21年より理事に就任され、28年より副会長を３期務められ、久島前会長を補佐し、医師会活動を支えてこられました。

先生は中学時代から剣道部に所属され、日本医科大学時代も東医体団体戦に出場し、また関東医歯薬獣医科大学剣道大会で団体優勝されているそうです。現在も６年間、稽古、合宿を通して苦楽を共にした生涯の友人が財産になっているそうです。

先生の現在の趣味は魚釣りで、生まれ育った十勝の大樹町でお父様に連れられて川や海で釣ったのが始まりだそうです。

春は標津、尾岱沼、風蓮湖近郊でのカレイ釣りから始まり、夏は道東を中心とした港でのルアーや浮かせ釣りによるサケ釣り、秋は釧路市内、音別、白糠方面でのコマイ釣り、冬は納竿期という１年とのこと。しかし現在はコロナ禍でもあり、超多忙を極め、趣味の釣りも全く楽しめない状況が続いています。

現在釧路市医師会は、新型コロナウイルス感染症対策が最優先課題ですが、健診センター、夜間急病センター、看護学校の運営や救急医療体制の維持、介護・福祉との連携、CKDネットワーク等の釧路市医師会独自の事業の継続・発展など取り組むべき課題は山積しております。

私は柴田会長と同期で、公私ともに親しくお付き合いさせていただいております。会長の掲げる「人の命と心を大切にする医療」を実践するため、今後も会長を補佐させていただきます。

今後はますますお忙しい日々が続くと思いますが、健康には十分に注意され、たまにはストレス解消のため「焼肉」でも食べに行きましょう。

いつかまた、「好きな魚釣りが心置きなく満喫できる」そういう時が来ることを楽しみに頑張っていきましょう！

釧路市医師会副会長　山本　直樹

北海道大学医師会

会長　渥美（あつみ）　達也（たつや）　先生

北海道大学医師会長に渥美達也先生が本年４月より就任されましたのでご紹介いたします。

先生は昭和63年に北海道大学医学部を卒業され(64期)、北海道大学第二内科に入局されました。平成６年から約３年間、英国聖トーマス病院レイン研究所に留学され、その後、第二内科の講師・准教授を経て、平成24年より第二内科から改称となった免疫・代謝内科学分野の教授に就任されました。平成26年から北大病院病院長補佐、平成31年から副病院長、同時に平成27年から２年間、医学研究科副研究科長と病院･医学研究科の要職を務められ､本年（令和４年）４月より北海道大学病院長、北海道大学副学長にご就任されております。

先生は、一貫してリウマチ･膠原病内科の臨床研究および基礎研究を行ってまいりました。全身性エリテマトーデス（SLE）の疾患感受性遺伝子に関する研究で学位取得後、SLEのもっとも重要な合併症である抗リン脂質抗体症候群（APS）における血栓形成機序の解明、APSの診断のための自己抗体検出法確立などの基礎研究に加え、APSのリスク評価、治療プロトコール開発などを行ってきました。これらの研究成果は650編を超える論文として発表され、SLE診療ガイドライン（2019)、APS治療のてびき(2021）作成チームの委員長を務められております。令和６年４月には第121回日本内科学会総会会長に決まっており、同学会の会長を北海道が担当するのは60余年ぶりです。

先生は病院長就任後すぐに「職員との信頼関係のもとで運営する」､「北大病院職員は医療・医学のプロフェッショナルであり、各自の判断はリスペクトされるべきである」との方針を打ち出し、このことは新基本方針のなかの「人間性豊かで自律した医療人の育成」という文言にも反映されています。渥美新病院長のもと全職員が一致団結し、北大病院は良質な医療を提供すると共に､優れた医療人を育成し、先進的な医療の開発と提供を通じて社会貢献していきたいと思います。北海道医師会のみなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

北海道医報通信員
北海道大学医師会常任理事　本間　明宏

旭川医科大学医師会

会長　古川（ふるかわ）　博之（ひろゆき）　先生

令和４年４月、古川博之先生が旭川医科大学医師会長として就任されました。先生は平成30年７月より令和３年１月まで会長をお務めになりましたが、今回２度目の就任となりました。

先生は昭和55年に神戸大学医学部を卒業し、天理よろづ相談所病院で研修の後、ピッツバーグ大学外科に留学、アシスタントプロフェッサーとなられました。その後平成９年に帰国、北海道大学第一外科助手、同講師を経て平成13年４月より北海道大学置換外科・再生医学講座教授に就任されております。その後平成22年１月に本学外科学講座消化器病態外科学分野教授となられ、病院長補佐、副病院長、病院長・副学長を歴任されました。令和４年４月より現職の本学理事･副学長･病院長に就任されています。

また先生は「新型コロナウイルス（COVID-19）の流行初期より市内の基幹病院と医師会・保健所が包括的対策と連携について協議してきた。経時的にCOVID-19の感染力は強大化し、重症患者数は減少したが、自宅療養者数が急増して保健所の業務が逼迫している。最近では患者数増加に加えて病院職員の感染も見られる。各病院ではCOVID-19用の病床数を増加させているが、一般患者への診療への影響が惹起され、医療崩壊が進行しつつある。ラゲブリオは重症化防止に有用と期待されるが、変異株にも有効なワクチンの開発が待たれる」とコメントされています。

働き方改革としては「将来的な時間外労働960時間の達成に関しては困難が予想される。当院では長時間の時間外勤務が一部に見られたが、70％は外科医、次いで内科医、救急医の順であった。外科医の数も減少傾向が続いていることから、目標設定の変更も求められる」とのコメントも頂きました。

座右の銘は「人間万事塞翁が馬」で、特に不条理を受け入れる塞翁の達観が光るとのことです。

古川先生のご活躍の下、本学医師会の益々の発展を祈念し、ご紹介とさせていただきます。

北海道医報通信員
旭川医科大学医師会理事　沖崎　貴琢